

Lecturer
遠藤幹子

Subject
『もしもデザインで
世界が変わるなら』

物質的な満足や経済優先の開発によって、人の暮らしの真の豊かさが失われつつある今の東京において、どのような社会を人々が求め、そのためにどのような場をつくるべきなのでしょう。この課題では、生徒一人一人が日々実感する「生きづらさ」の正体を掘り下げ、訪れてほしい未来の像を描き、空間デザインに反映するトレーニングを行いました。就職活動による心労をどう昇華できるのか？ どうしたらもっと互いに思いやりを持っているのか？ なぜヘイトスピーチが起きてしまうのか？ どうしたらホームレスを排除しない町になるのか？ など、学生からはさまざまなテーマが挙げられ、その問いに対する答えを、彼らなりのカフェの提案としてまとめました。

思いやりの1200

秋山和也

外食をした際正面に人がいて非常に食べづらいという経験がある。その問題は人と人がコミュニケーションをとれる「距離」と「機会」があることで解消されると考えた。「壁付けのテーブル」から料理を注文すると距離1.2mを保たれた「厨房を取り囲んだテーブルの人」が料理を受け渡してくれる。このように思いやりが発生するシステムがあれば、日常的に人が人を思いやることができる考えた。



模型写真:客同士の料理の受け渡しによって生まれる感謝。



リサーチ:「思いやり」について考察。感謝することが思いやりを生むという結論を導いた。

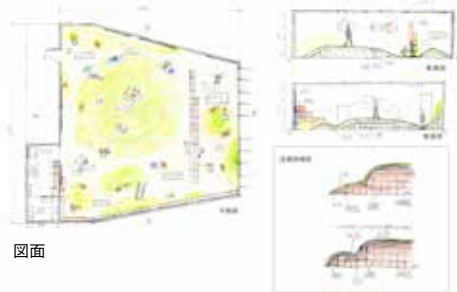


平面図

絵本カフェ

安田友美

私が普段疑問に思っていること、それは「世の中にもっといろいろな人と接することのできる場所や機会がないだろうか」ということです。前半のリサーチ課題から「人は誰でも自分を知ってもらいたい」という欲求を持っている、という結果にたどり着きました。私が設計した絵本カフェでは、公園のような空間で気軽に本を読めるようになっていて、本に興味なくても気軽に立ち寄り、いろいろな人と話したりすることができます。ここでみんながお互いを知ることのできる楽しい空間になってほしいと思います。



図面



リサーチ:「何かに所属している私」ではなく「私そのもの」を知ってほしいと誰もが思っている。